

教育イノベーション推進センター NEWSLETTER

発行日 2014年 5月 1日【第2号】

芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

Contents

2013年度教育賞表彰式 FD・SD講演会	1
教育賞受賞者のコメント	2
IR部門2014年度活動計画	3
キャリア教育部門活動報告	4
FD・SD推進部門活動報告	5
教育・学習支援部門活動報告	6
グローバル推進部門活動報告 男女共同参画推進シンポジウム報告	7
メンタルケア授業実施報告	8

芝浦工業大学
教育イノベーション推進センター
NEWSLETTER 第2号

発行者
芝浦工業大学
教育イノベーション推進センター
e-mail
edudvp@ow.shibaura-it.ac.jp
〒337-8570
埼玉県さいたま市見沼区深作307
Tel: 048-687-5049

所管部署
芝浦工業大学
教育イノベーション推進センター
事務課



大宮校舎の八重桜

たゆまぬ努力を讃えて 2013年度教育賞受賞式



2014年4月2日のFD・SD講演会の中で、2013年度教育賞の表彰式が行われた。教育賞は「担当科目の授業運営あるいは教育改善活動において、優秀な実績を挙げた教員であって、学生に大きな刺激を与えた者に対して」授与される賞で、学部や学科からの推薦に基づいて受賞者が決定される。今回は7件が表彰の対象で、村上学長から賞状が手渡された。

表彰式のあと、受賞対象となった授業を紹介する講演が行われた。受賞対象には、一方には個人で取り組まれた授業改善があり、他方には学科や専攻全体で取り組まれた実験・実習や演習の改善があり、7件それぞれに特徴があって、いずれも参加者の関

心を引きつける講演だった。「講演時間が短いので、ほかの教員の参考になるポイントだけを要領よく紹介してほしい」という当方のわがままな注文にもかかわらず、短い時間を上手に使ってご講演いただき、参加者には好評だった。特に実験・実習や演習の改善を進められた事例では、企業や海外の大学の協力を得るなどして、学生が卒業後に社会で活躍するための実践的な能力を育成するしくみがさまざまに工夫されており、大いに参考になる講演であったと思う。

今後も、この賞を励みに優れた授業改善が続くことを期待している。

(学長室 中村朝夫)

★2ページに受賞者のコメントを掲載しています。

FD・SD講演会に220名が参加



FD・SD推進部門が年度当初に企画・実施するFD・SD講演会が、2014年4月2日(水)に大宮校舎で、220名以上の参加者を集めて開催された。今年度は国立教育政策研究所

高等教育研究部長の川島啓二先生に、「大学生の主体的な学習を促すカリキュラムの構築に向けて」という演題で基調講演を依頼した。個々の教員の授業実施に関わるFD支援プログラムは徐々に普及してきているが、カリキュラムデザインに関する組織支援策の議論は緒に就いたばかりである。川島先生は、日本高等教育開発協会とベネッセ教育総合研究所による調査結果を基に、今後に向けて多くの示唆を示した。講演後、教育賞受賞者の表彰と、各受賞者による講演があり、3時間ほどの講演会を終えた。

(FD・SD推進部門長 榊原暢久)

より良い教育を目指して 教育賞受賞者のコメント

「機械ゼミナール1」 受賞者：工学部機械工学科全教員 代表：山西陽子准教授

機械工学科「機械ゼミナール」がこのような荣誉ある教育賞を頂きましたこと深く感謝いたします。この賞は機械工学科佐伯先生・角田先生・丹下先生の多大なるご貢献を始め、機械工学科全教員の協力及び国際部並びに国際グローバル推進部門の皆様のご協力があったはじめて達成できた成果です。これを新たな出発点として今後も実社会で役立つ教育や国際化へ向けた教育や研究に取り組んでいきたいと思ひます。



「電気工学ゼミナール」 受賞者：工学部電気工学科全教員 代表：赤津 観准教授

このたびは電気工学科で実施している3年生の選択科目「電気工学ゼミナール」につきまして教育賞を受賞させていただき教員一同大変嬉しく思っております。当学科では日頃のFD活動を通じてカリキュラムや実施方法について常にディスカッションしており、“真に学生のためになる授業”を実施しようと日々努力しております。こうした取り組みが実を結んだことを嬉しく思うと同時に、これに満足せず再度身を引き締めて今後も改善活動に取り組んでいく所存です。



「有機化学1」 受賞者：システム理工学部生命科学科 須原義智教授

この度は教育賞を受賞させて頂き大変光栄に思っております。関係された諸先生方、ならびに高い評価を与えてくれた学生諸君に感謝致しております。私は常に講義内に何を伝えたいのかを明確にし、学生には「基本」を理解させることに重点を置いて自分なりに工夫をして参りました。これからもこの賞を励みにして、講義の中で「教員が何を教えたか」ではなく「学生が何を学んだか」を実践できるように努力していく所存です。



「生命倫理概論」 受賞者：システム理工学部環境システム学科 中川雅博非常勤講師

この度の思いがけない優秀教育賞の受賞、驚きとともに、大変光栄に存じます。諸先生方、受講生、そして関係者の皆様に心より御礼申し上げます。受賞を機に、科学技術に欠くべからざる「生命への畏敬」「人間の尊厳」を伝える者として、自らに課された使命の重みを再確認しました。今後も、受講生に「学びの心」を呼び起こすべく、教育および研究に研鑽を積みみたいと思ひますので、変わらぬご鞭撻とご支援、宜しくお願い申し上げます。



「総合プロジェクト」(卒業研究) 受賞者：デザイン工学部デザイン工学科 戸澤幸一教授

教育賞の荣誉を頂き、誠にありがとうございました。総合プロジェクト(卒業研究)として、首都圏の製造業、地域団体、行政などと広く連携し、最新の社会ニーズに合致した実践的な研究テーマを選び、研究室14名の問題解決能力向上を図りました。特に2014年度は獲得した11件の受託研究はじめ地域との密接な連携により、日々研究室の学生を親身に指導するなかから、様々なノウハウを積み上げてきました。このノウハウを専門の異なる教員や若手教員の皆様にも伝承し、今後益々教育の質向上に邁進していく所存です。



「システム工学特論・同特別演習」 受賞者代表：大学院理工学研究科システム理工学専攻 長谷川浩志教授

受賞者：相場 亮・井戸川知之・井上雅裕・大塚裕史・越阪部奈緒美・小山友介・陳 新開
長谷川浩志・古川 修・松下 潤・間野一則・山本紳一郎(五十音順 敬称略)

この度は、システム工学特論、同特別演習の領域横断型大学院教育プログラムに対して優秀教育賞を頂き有難うございました。この教育プログラムは、ジェネリックスキルテスト(PROG)等による教育の質保証を伴った講義とPBLの組み合わせで構成され、学部3年のシステム工学演習Cと連携することで、世代+複数領域を横断した問題発掘力と総合的問題解決力を修得させるものです。今後も、この受賞を励みに本プログラムを担当している教員一同の総合力を結集し、総合的問題解決力を有した人材を輩出して行きたいと考えております。



「インターンシップ」 受賞者：専門職大学院工学マネジメント研究科 堀内義秀教授 稲村雄大准教授

教育賞を頂きまして、どうもありがとうございました。専門職大学院である工学マネジメント研究科では、インターンシップを、学部新卒学生が社会に出て即戦力として羽ばたくための重要な一歩と考えております。後期に、1社または2社で、毎朝スーツを着て満員電車に乗り業務を3か月間こなす、という就業経験を積ませます。これに参加した学生は、2か月、3か月と経つうちに、「即戦力」といった顔つきに変わってきます。工学マネジメント専攻では、理工学研究科や各学部にも、工学マネジメント専攻で培った長期インターンシップの経験やノウハウを使って、何らかの形で学生の教育のお手伝いができれば、と考えております。



ポートフォリオの充実と質保証

IR部門活動計画

IR部門では、本学全体の教育の質保証を目的に、全学科、関連部署の参画での活動を進めている。これまで、教育目標の設定、カリキュラムマップの策定、卒業研究の学習教育目標の設定、ルーブリック設定、電子ラーニングポートフォリオを導入を進めてきた。

2014年度には、これまでの活動を踏まえて、日本の工学教育の特徴である卒業研究の質保証、学生のためのポートフォリオの全体設計、そして、グローバル人材育成事業との連携により、海外との連携教育プログラムの質保証の推進を計画している。

1. 卒業研究の質保証

- IR部門の全学ワークショップを媒介に、全学科で卒業研究の質保証に取り組む。質保証の手段等の共通のガイドを設けて進める予定だが、各学科の特徴を踏まえて各学科が知恵を絞って進め、それをワークショップで共有し、全学の卒業研究の質保証に繋げて行く。
- 質保証とは、適切かつ明確な教育目標を設定し、その達成を可能にするカリキュラムを構築し、その学習成果を評価し、継続的な改善を行うことである。
- 明確な教育目標：学科、学部の教育目標に対し、卒業研究で何を担うかを明確にする。
- 卒業研究の学習・教育目標を達成された状況を、ルーブリックで明確に記載し、学生に開始時に提示できるようにする。
- 学科教員陣として学習成果を評価する。その時期は、研究テーマの設定確認、中間発表、ポスター発表、最終発表などが想定されるが、各学科での検討をお願いしたい。
- 卒業研究の途中段階、最終段階のそれぞれにおいて、学修ポートフォリオを用いて自己評価、振り返りの機会を設ける。その学修ポートフォリオは全学で仕組みを提供できるように進める。
- 各学科で目標、実施方法、評価方法を工夫し、継続的改善を行う。

2. SITポートフォリオ ※図1参照

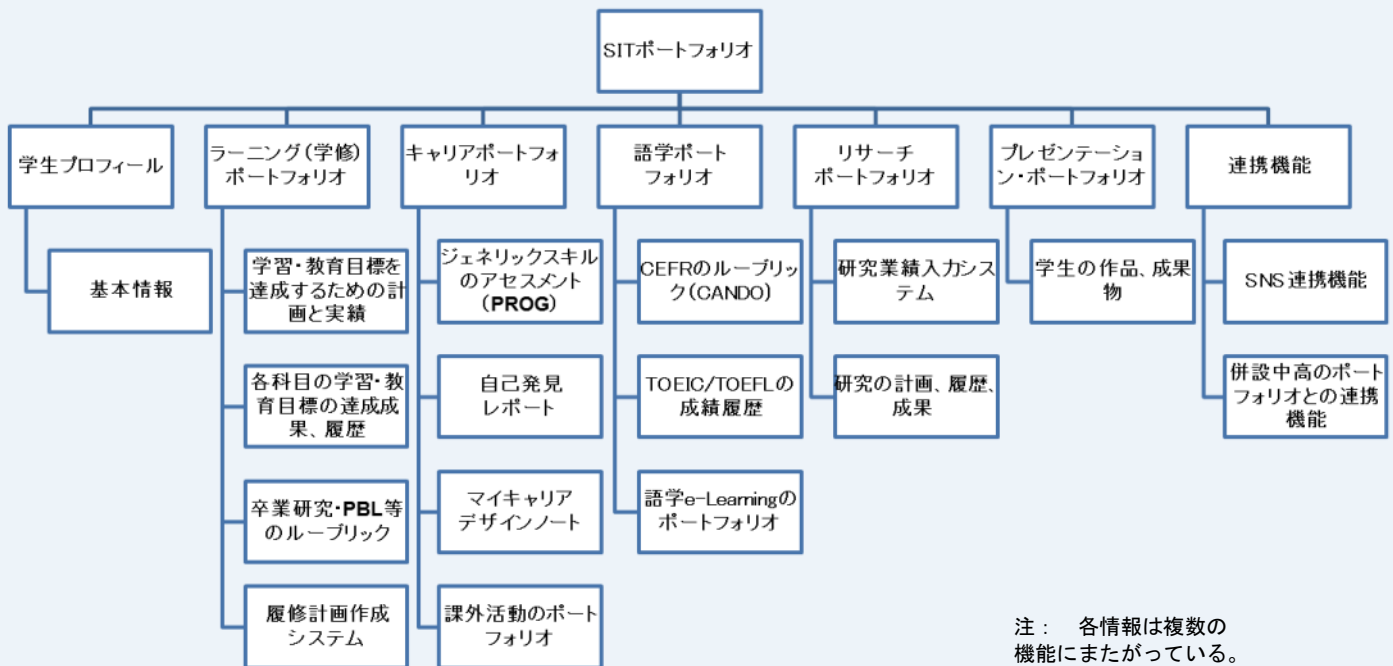
- 学生のための学修とキャリア履歴の開発をしてSITポートフォリオの設計を進めて行く。SITポートフォリオには、これまで進めてきた学修ポートフォリオに対し、キャリアポートフォリオ、語学ポートフォリオが加わっている。
- また、三つの意味でオープンなポートフォリオの構築を目指す。つまり、
 - ◆ 使用環境が自由、オープン：スマートフォンで使用可能、世界のどこからでも使用可能
 - ◆ 発信が自由、オープン：学生の作品や成果を展示、デモできる、世界と交流ができる
 - ◆ 設計が自由、オープン：完全自前主義ではなく、世界のオープンソースを活用し、構築する。

3. 海外との連携教育プログラムの質保証（グローバル部門との連携により実施）

- 本学と世界各国の大学との連携教育が拡大している。ここで重要なのが、連携プログラムの質保証である。各大学が相互に質を確認し、保証できる手段が必要となる。
- 国際PBL、国際インターンシップは、大学院や各学部の正課としての質保証（目標、カリキュラム、評価）が重要になっている。
 - 国際インターンシップで、世界の各地でインターンシップの活動している学生の学修履歴を蓄積し、学生の振り返りを促し、現地の指導者や、日本にいる教職員も活用できる学修ポートフォリオを実現することで、インターンシップのプロセスと成果を確認できる電子ポートフォリオの構築を進めて行く。
 - 共同開講科目の質保証、単位発行の仕組みの構築は、将来の、ダブルデグリー、ジョイントデグリーでの教育の質保証の基礎になる。

(IR部門長 井上雅裕)

図1 SITポートフォリオの構成（例）



注：各情報は複数の機能にまたがっている。図は機能を例示したものであり、情報システム的设计を示したのではない。

CEFR: Common European Framework of Reference for Languages
PROG: Progress Report On Generic Skills

学生の成長を促す学びの創出

キャリア教育部門活動報告

●企業から出された課題にグループで取り組む「産学協同講座」で学生が大きく成長

自主的・自発的に学ぶ姿勢を身につけ、学びに対するモチベーションを高めることを目的に、1、2年生を対象に「産学協同講座」を開講した。15回の授業形式で、前半と後半に分けて2つの企業から課題を出してもらった。2013年度の課題は、凸版印刷からの「スマートフォンを使った高齢者向け事業を考えよ」とNTTデータからの「ベトナムでの新規事業を企画せよ」だった。中間プレゼンと最終プレゼンの際に、企業の方に直接指導してもらった。

2013年度は試行として希望者に対して課外で実施したが、最終的に40名が最後まで講座に参加し、上記2つの課題にチャレンジした。参加した学生は、「企業で働いている人の考え方がわかってよかった」「他の授業では学べないことを学べた」といった感想のほか、「一人ひとりがそれぞれ違うものの見方をしていることがわかった」「他学科や他学部の人と話すことができてよかった」「グループで何かを成し遂げることの大切さを学んだ」などの感想を述べており、それぞれに得るものが大きかったようだ。

この講座に参加した学生に対して、講座修了後にPROGのテストを行い、講座前後の基礎力の変化を測定した(図1)。受講生のコンピテンシーは、受講前後で大きく変化しており、受講後には、判定レベルの分布が高レベル側へ大きくシフトしている。本学の一般学生では2年生でもまだレベル1と2の分布が大きいのにに対し、受講生では分布のピークがレベル3と4にある。本講座の受講を通して、コンピテンシーを高めることができたことがよくわかる。2014年度もこの講座の試行を継続する予定である。

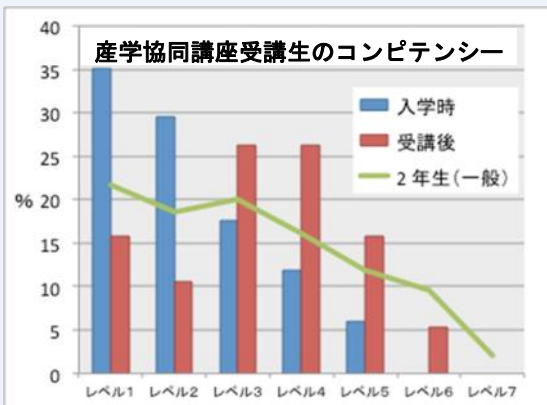


図1. 産学協同講座参加学生のコンピテンシーの受講前後の変化 (PROGによる測定結果)

●基礎力(ジェネリックスキル)の育成への教員の意識についてアンケート調査

教員が各授業科目において、基礎力の育成にどれだけ注力しているかについて、工学部応用化学科の教員全員とシステム理工学部共通科目(システム・情報科目と総合科目)の担当教員全員を対象に、アンケート調査を行った。

応用化学科では、基礎力育成の場として講義科目はあまり重要視されていないものの、低学年では実験科目と導入科目、高学年では研究室でのゼミナールと卒業研究で、基礎力の育成が強調されていることがわかった。

応用化学科の2年生について、昨年からの基礎力の伸びをPROGテストによって測定したところ、ほとんどの項目について順調に伸びていることが確認され、実験科目や導入科目での学習の効果であることが示唆された。

システム理工学部でも、同様の検証作業を行っている。今回のアンケートで得られたような情報をシラバスの作成時に収集することができれば、随時、基礎力に関するカリキュラムの有効性を検証することができる。一方、教員がどの基礎力の育成に注力しているかをシラバスに記載すれば、学生が授業科目の履修計画を立てる際に参考にすることができる。現在、本部門では、このようなシラバスの使い方をなるべく教員の負担にならない形で実現する方策について検討を重ねており、近く具体策を提案する予定である。

(キャリア教育部門長 中村朝夫)



2013年度産学協同講座受講風景

2014年度「産学・地域連携講座(FSP講座)」の説明会開催について

上記報告にある「産学協同講座」を「産学・地域連携講座(FSP講座)」として、2014年度後期に開講することが決定した(内容は右表参照)。新学期のキャリアガイダンスにおいても紹介しているが、5月に説明会を開催する。

●産学・地域連携講座(FSP講座)説明会

5/13(火) 5限 (会場:大宮校舎 2301教室)
5/22(木) 5限 (会場:大宮校舎 2401教室)

- ・昨年度の講座参加者による経験談
- ・ビデオによる昨年度の講座風景の紹介

※講座の概要は右記の表を参照。

※講座の対象は1、2年生で定員60名。

※講座は毎週金曜5限に大宮校舎で実施する。

2014年度産学・地域連携講座実施スケジュール(予定)

コマ	日にち	内容
1	9/19	マインドセット、ルール説明
2	9/26	チーム編成、課題、ディスカッションの説明
3~7	10/3~11/7	A社の課題に取り組む(グループ活動、プレゼン)
8	11/14	振り返り
9	11/21	スキル紹介、チーム再編成
10~14	11/28~1/9	B社の課題に取り組む(グループ活動、プレゼン)
15	1/16	全体の振り返り、今後の学びの検討

教職員のニーズに応えるプログラムの実施

FD・SD推進部門活動報告

【教職員支援としてのプログラム】

FD・SD推進部門が2013年4月以降に実施した活動は以下の通りである。各プログラムの内容については、センター発行のNEWS LETTER 創刊号をご覧ください。

(1) ティーチング・ポートフォリオ作成WS

(多摩永山情報教育センター)

第7回 2013年8月26日(月)～27日(火) 参加者5名

第8回 2014年3月16日(日)～17日(月) 参加者5名

(これまでの参加者合計 43名)

(2) ティーチング・ポートフォリオ完成WS

(芝浦校舎)

第3回 2013年9月11日(水) 参加者6名

第4回 2014年3月11日(火) 参加者6名

(これまでの参加者合計 24名)

(3) 「授業外学習を促すシラバスの書き方」WS

第6回 2013年9月9日(月) 参加者7名(大宮校舎)

第7回 2014年3月10日(月) 参加者7名(豊洲校舎)

(これまでの参加者合計 53名)

(4) SCOT (Students Consulting on Teaching) 研修

第3期SCOT研修

2013年4月20、27日、5月11、25日および実地研修、課題発表会
(5名受講、うち1名がSCOT登録)

第4期SCOT研修

2013年10月10、24日、11月7、21日および実地研修、課題発表会
(3名受講、うち2名がSCOT登録)

第5期SCOT研修

2014年4月24日、5月1、15、29日(予定)および実地研修、課題発表会

(5名受講中)

(5) SCOT活動

現在11名のSCOT学生(工学部3年3名、システム理工学部3年7名、4年1名)が活動中。

教員による利用実績→2013年度前期4名、2013年度後期6名



【その他】

(1) 全国私立大学FD連携フォーラム総会出席

(2013年6月15日 立命館大学)

(2) 全国私立大学FD連携フォーラムミーティング出席

(2013年12月23日 立命館大学 東京キャンパス)

(3) FDカレンダーの配布

また、2014年度における新規・変更事項は以下の通りである。

【授業デザインWS(仮称)の新規実施】

「授業外学習を促すシラバスの書き方」WSに続く、評価項目、評価方法、授業方法について学ぶWSで、「授業外学習を促すシラバスの書き方」WSとともに、希望者対象に後期のみ実施する予定。

【FDカレンダーの年2回配布】

前期・後期当初の年2回、FDカレンダーを配布し、学内外WS等の情報をお知らせする予定。

(FD・SD推進部門長 榊原暢久)



【組織支援としてのプログラム】

(1) 新任教員研修(豊洲校舎)

2014年4月1日(火)、2日(水)

学情センターと図書館からの説明、学内LAN、教卓システムの使い方、事務端末の使い方、図書館の利用方法

(2) FD・SD講演会(大宮校舎)

2014年4月2日(水)

教育賞表彰、受賞者の講演

基調講演(国立教育政策研究所高等教育研究部長 川島啓二先生)

(3) 新任教職員研修会(豊洲校舎)

2014年4月12日(土)

9時30分～16時で各種説明の後、懇談会

(4) 入職3年目以内教員フォローアップ研修(豊洲校舎)

「授業外学習を促すシラバスの書き方」WSと「授業デザインWS(仮称)」の内容で、9月2日(火)に実施する予定。

【FD・SD推進部門会議】

●2013年6月3日(月) 12:30～14:10

WS実施計画、学外シンポジウム等の紹介指針・参加費・旅費補助基準について、教育賞に関する検討提案 等

●2013年7月30日(火) 13:00～14:30

教員資格審査内規へのFD 関連ポイント追加への提案、教育賞に関する検討提案、

FD・SD 助成交付者の成果共有の方法について 等

●2013年12月25日(水) 10:30～11:30

FD・SD講演会の講演者について、新任教員研修会&新任教職員研修会の日程・内容について、授業デザインWS(仮称)について 等



学部の特性に沿った学習支援の実施 教育・学習支援部門活動報告

本部門の使命は、全学に共通する教育・学習支援に関わる事項について種々の課題を取り上げ、関係する学部・部門と協力し実現（解決）に向けて具体策を協議し実行、支援することである。具体的には、学習サポート、障がい学生のサポート、「メンタルケア」の講義の全学での実施支援などに取り組んでいる。今回は各学部での学習サポートについて、その取り組み状況について報告する。

(教育・学習支援部門長 徳永幸生)

【工学部の取り組み】



工学部では、数学・物理学・化学・英語の学習支援のために、『学習サポート室』を大宮校舎の学生会館2階に開設している。学習サポート室では、工学部の共通科目を実際に担当し、各科目で教授している内容と受講学生の様子を理解している教員が質問等に対応している。また、工学部共通学群の当該科目では、専任教員から教務担当やサポート室担当を選出し、教育的連携や支援を行っており、授業内容が理解できない、演習問題が手に付かないなど基礎学力が不足している場合は、できるだけ早く学習サポート室を訪ね、相談することも勧めている。開室時間は月、火、水、木、金曜日の概ね14:40～18:00で、予約なしに相談できる。教員とのマンツーマンで個別指導を受けることも可能であり、また、友人同士のグループでの指導にも対応している。



また、学習サポート室では、授業中にわからなかったことや学習の進め方についてのアドバイスなど、学習全般の相談の場として利用者の要望に応えるほか、学力に応じた補助教材を紹介したり、基礎的な演習問題を出したりするなど、継続的に基礎固めをはかるプログラムも科目ごとに用意している。利用状況については、2013年度の場合、表のとおりで、延べ人数で言えば、工学部1、2年生の半数以上が利用している。

(工学部 松田晴英)

2013年度工学部学習サポート室利用者数(単位:人)

2013年度	数学	物理	化学	英語	合計
前期合計	310	459	87	153	1,009
後期合計	158	150	19	67	394
合計	468	609	106	220	1,403

【システム理工学部の取り組み】

システム理工学部では2012年に学習相談室が開室され、システム理工学部の学生を対象とした学習相談を行っている。まず、2012年6月と7月に5号館3階の空きスペースを利用して、学習相談室の試験運用を開始した。その後、2013年前期には6月3日から7月31日までの2カ月間、5272室で、2013年後期は10月14日から2014年1月28日まで、5号館2階に新しく作られた談話スペース「イ・コ・バ」内の専用スペースにて開室された。



相談室ではシステム理工学部出身の大学院生が常駐し、学習相談員として対応している。大学院生は面接を経て採用された者がTAとして週あたり計5～10時間程度、勤務している。

開室時間は月、火、水、木、金曜日の13:00～19:00で、予約なしに相談に行くことができ、相談科目の制限は特にない。相談員では対応できない質問の場合には、教員を紹介す

ることもある。試験運用の2012年度には相談件数の3割程度、教員紹介をしていたが、2013年度はほとんどの質問に相談員で対応した。

利用状況は、学部基礎科目が最も多く、2013年度の前期の場合、6月は17名、7月は20名の相談者が訪れている。次いで専門科目が6月は4名、7月は15名で、残りはシステム・情報科目、その他の相談となっている。学科別では電子情報システム学科、機械制御システム学科、生命科学科の質問が多く、学年別では1年生が最も多い。期末試験の近くに質問が集中する傾向があるようだ。

(システム理工学部 鈴木達夫)



【デザイン工学部の取り組み】



大宮キャンパスのデザイン工学部学習サポート室では、現在様々な学習支援活動を行っているが、本稿では筆者の関与する英語学習サポートの活動を紹介します。

デザイン工学部では、芝浦キャンパスですべての授業を実施していた開設当初から、学習サポートのためのスペースを確保し授業外の学習支援に当たってきた。その中で見えてきた大きな課題の一つは、学生の問題意識をサポート室利用に直接に結びつけるような工夫の必要性である。この課題を踏まえ、1、2年次科目の大宮開講と平行して大宮キャンパスで学習サポート室を開室することになった際、多くの学生にサポート室の活動に参加してもらうための新しい取り組みを始めた。それが現在の学習サポート活動の中心の一つである、TOEIC対策セミナーである。現在、多くの学生がTOEICのスコアアップを英語学習における最も重要な課題の一つに位置づけている。そこでTOEIC対策のためのセミナーを開講することとした。デザイン工学部では学生にTOEIC-IPテストの受験

機会を複数設けているが、その一番最初となるのが入学時のプレイメントテストである。ほとんどの学生にとってこれが初めてのTOEIC-IPテスト受験となっているようで、その受験直後は、結果の良し悪しにかかわらず、多くの学生が英語学習に前向きな姿勢を見せることがわかってきた。そこでこの入学間もない時期に、ガイダンスや英語科目の初回授業などの様々な場面で、セミナーの告知を積極的に行うことにした。結果、毎年このTOEIC対策セミナーには一定数の申し込みを集めている。

現在デザイン工学部の英語学習サポートでは、TOEIC対策セミナーの他にも、様々な学習サポートのあり方を模索・実行している。例えば、昨年度より大宮開講の英語科目について、担当の先生方の積極的なご協力を仰ぎ、学習サポート室での取り組みを正課の授業に内容的に連動させる仕組みの導入に取り組んでいる。この他にも、学生のニーズと授業担当の先生方からのフィードバックをくみ上げて分析し、毎年新しい企画を考えたり、旧来のサポート活動に生かしている。



(デザイン工学部 櫻木 新)

さらなるグローバル化を推進

グローバル推進部門活動報告

はじめに

グローバル推進部門は文部科学省採択のグローバル人材育成推進事業(Global Human Resource Development)の推進を中核として、全学のグローバル化を推進している。この事業をGo Global Japanとの愛称で文部科学省が呼んでいることから、文部科学省プロジェクトを指す愛称として「Go Global SIT」を使用する。

2013年度までの活動

2012年秋から2013年度末までの活動の結果、海外渡航者数の増大、英語による講義実施数の増大、問題解決型学習(PBL)の普及が挙げられる。たとえば表1に2014年2、3月に海外渡航学生が参加したプログラムを示す。夏期・春期に英語研修、PBL研修、研究室配属研修、そしてインターンシップなどのプログラムが多様に準備されているので、学生たちは国と内容を勘案してプログラムを選択することができる。結果、渡航者数は驚異的に増大している。このように、海外渡航学生数が増えた背景には、日本学生支援機構(JASSO)による競争的資金による経費支援がある。成績評価値が一定以上の学生には欧米で月8万円、東南アジアでは月7万円支援される。この成績評価を満足できない場合でも、芝浦工業大学独自の制度が2013年よりスタートし、本学が支援している。

表1 2014年春期海外渡航プログラム別参加学生数

期間	プログラム名	学生数
2/5-3/11	UCI語学留学	72
2/9-2/21	ポーランド(AGH)研修	5
2/10-2/22	タイ(KMUTT)工学英語研修	25
2/13-2/23	タイ(KMUTT)gPBL研修	27
2/16-2/27	ヨーロッパ(EPFL、ラクイラ)研修	9
2/17-2/28	韓国(忠南大学)研修	2
2/23-3/10	マレーシア(UTM)工学英語研修	29
2/23-3/9	インド(ANNA)工学研究研修	26
2/23-3/8	台湾(台湾科技大学)工学研究研修	2
3/1-3/12	ベトナム(ハノイ工科大学)gPBL研修	4
3/14-3/24	ベトナム(ハノイ工科大学)gPBL研修	13

2014年度の活動計画

2014年度は過去1年半の活動をより充実させると共に、主に工学部中心で実施してきたグローバル化のさまざまな試みを大学全体に広げる計画を立てている。特に、海外提携大学との問題解決型学習(PBL)の企画・推進、工学教育の国際化として英語による講義の普及を展開する。学生が在学中に複数回TOEICとPROGを受験することは既にスタートしているが、受験率を一層高める。また、自己の能力評価や達成度評価が出来るように、Can-do Listの導入、ならびに、学生が自ら学習の目標設定を行えるシステムを確立する。

(グローバル推進部門長 新井民夫)

男女共同参画推進キックオフイベントを開催 男女共同参画推進室

本学は「チャレンジSIT-90作戦」のもと、男女共同参画推進に取り組んできた。その取り組みは、2013年度に男女共同参画推進室の開設、文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」採択によって本格化した。

本格稼働を画し、さる3月15日に豊洲キャンパスで「芝浦工業大学 2013年度男女共同参画推進シンポジウム～ダイバーシティ&インクルージョン、さらなる飛躍を求めて～」を開催した。シンポジウムの目的は、本学における男女共同参画の現状と課題について全学的な認識共有をはかることである。まず五十嵐久也理事長が「開会の辞」で、シンポジウムがグローバルな視点で社会と技術の進歩に貢献し、リーダーシップを発揮できる人材を輩出する大学にふさわしい女性の育成を進める契機となるよう期待を述べられた。

シンポジウムは、和田勝行文部科学省人材政策推進室長による「女性研究者支援と研究力強化」と木村忠正独立行政法人科学技術振興機構プログラム主管による「文部科学省女性研究者研究活動支援事業」が主賓講演として行われた。続いて、男女共同参画推進室から芝浦工業大学の男女比率の現状と全学意識調査結果の報告が行われた後、國井をコーディネーターに「女性研究者の飛躍に向けて」と題して、北澤宏一東京都市大学学長と村上雅人学長の対談が行われた。大学として男女共同参画推進に取り組む理由とその方策、特にポジティブアクションについては踏み込んだ意見が交わされ、両学長の男女共同参画推進に対する熱い思いが伝わる対談となった。

最後に米田隆志副学長のコーディネートのもと、牛尾奈緒美明治大学教授をコメンテーターに迎えて、全学部長・研究科長によるパネル討論「芝浦工業大学における女性教員の飛

躍と男女共同参画推進を求めて」が行われた。討論では各部門の現状や取組み、今後の具体的戦略が活発に論じられた。

教員・職員、卒業生、学生などの学内関係者に学外の方を加え、100名を超える参加者があった。男女共同参画推進室が主催する初のシンポジウムだったが、文部科学省、科学技術振興機構の関係者から充実した内容と理事長、学長、学部長、研究科長が全員揃って登壇参加されたことが高く評価され、参加者に対して行ったアンケートでも同様の評価が得られた。

今回のシンポジウムは、大学の責任者間で本学の課題、ポジティブアクションの必要性について課題認識の共有をはかる場になった。また、男女共同参画推進の認識を学内にどのように広く浸透させていくのか、女性教員の応募採用促進にどのように取り組むかなどの具体的な課題が可視化された意味も大きい。今後はシンポジウムの実績を着実に展開し実らせていきたい。(男女共同参画推進室長 國井秀子)



全学的にメンタルケア授業をスタート

希望に満ちて入学した新入生が大学生生活を快適に過ごすことができるように指導・支援することは、大学として極めて重要である。高校までの生活環境が一変し、学業や人間関係等に悩み、新しい生活に困惑するケースが多々見受けられるからである。

2013年度は、工学部の3学科でメンタルケアに関する講義を実施し、2014年度はさらに拡大する方向で検討が進められていた。一方、全学部においてもメンタルケアに関する講義が必要との声が上がってきたことから、教育イノベーション推進センターと学生・教職員健康相談室が協力して全学部・全学科を対象にした「メンタルケア授業」を開催することとした。

授業は原則、2014年4月に本学の学生・教職員健康相談室に着任にしたカウンセラーの佐藤速人先生が担当し、各学科の開催希望日が重なる場合にのみ、外部の講師をお願いすることとした。

講義内容は、「学生自身が自らのストレス状態を把握し、生活の見直しやストレスの対応を必要に応じてコントロールできることが大切だとの認識に立ち、学生に対し、自らのストレス状態を把握する方法や、ストレス・コーピングについて情報提供を行う」というものである。

これまでに（5月1日現在）9学科で実施されたが、いずれも学生たちから高い評価を得ている（アンケート結果参照）。

全学部・全学科を対象にした「メンタルケア授業」は2014年度に始まったばかりであり、2015年度以降、学生たちにとってさらに有用な授業とするために、適切な授業の開催時期、授業内容、冊子の配布など、皆様からのご意見を聞き、改善に努めたいと考えている。

（教育・学習支援部門長 徳永幸生）

2014年度新入生メンタルケア授業の内容

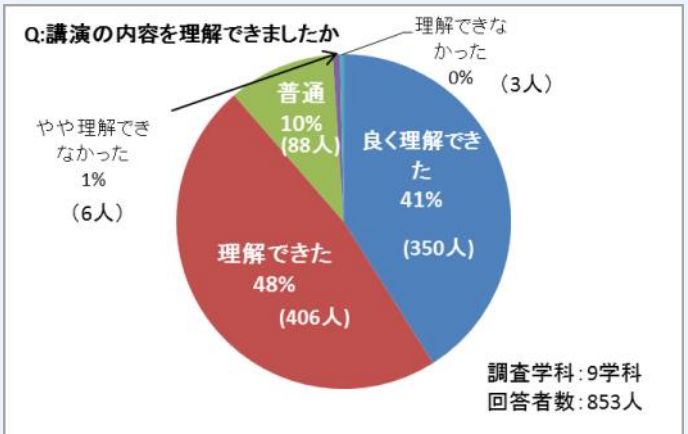
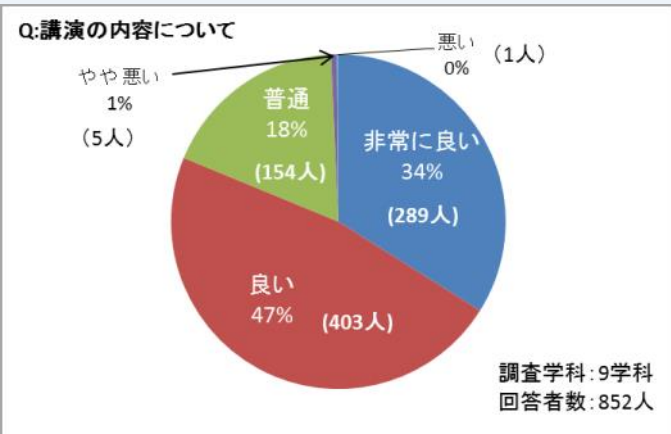
- ◆青年期のころ
（大学時代はこころの病にかかりやすい）
- ◆行動の問題（摂食障害、ネトゲ・SNS依存、自傷行為）
- ◆くすりのこと
（処方薬からアルコール、脱法ハーブまで）
- ◆こころの不調（睡眠障害、うつ・躁うつ、統合失調症）
- ◆発達障がい
（社会生活に問題がなければ個性とも言える）
- ◆こころの健康を保つ
- ◆困ったら相談できるこころの紹介



こころの問題は、実は身近なことだと気づいた学生が多かったようだ。

学生の反応は好意的。高評価を得る

～授業時に実施したアンケート結果から～



受講した学生の感想・意見（アンケートから抜粋）

- 様々な精神的な病気があるが、それぞれに解決策があることがわかった。大学生生活は楽しみたいと思った。
- 一人暮らしを始めたばかりで、まだまだ不安や心配はあるから、とても為になった。
- 身近に起きてもおかしくない話で重くなってしまいそうでも、たまに面白いことを言うてくれたので集中して聞けた。
- もしかしたら自分はSNS依存の一手手前かもしれないと思いました。気をつけたいと思います。
- 自分もあてはまる部分がありそうなので、見直したい。
- 聞きやすく、とてもためになった。最初は長いかと思ったが、すぐに時間が過ぎた。
- 面白く話をしてくれていたが、実際は笑って聞いていいことではなく、とても重要な話。今回の講演は、非常に為になった。
- 発達障がいなど、当てはまることがあった。
- 最近話題となっている問題について、興味はあったけど、このように詳しく聞ける機会がなかったので、とても良かったです。